



会 報

第22号

平成5年2月

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



新収蔵作品 藤田喬平「水指」1991年

すっきりと鋭利な形をもちながら、重厚さと華やかさを兼ね備えたガラスの水指。ガラスで茶道具をつくることは現在では珍しいことではない。しかし、藤田喬平が長年追求してきた飾笥の延長線上にあるこの作品は、透明なガラス地に濃淡の赤茶色のガラス粒を溶着し、さらに金箔、プラチナ箔、小豆色のガラス粒を巻き付けたのちに箔に亀裂を生じさせて、

複雑な肌合と色彩のなかに味わい深いけしきを醸しだしている。

日本の伝統的な美意識を新しい可能性を秘めたガラスという素材に託しながら、国際的に不動の地位を確立し、日本のガラス界に大きな足跡を残しているこの作家の風格のある作品のひとつである。

今後どうなる

ボランティア 養成のための 美術講座

当会は創立15周年を迎え、やがてその年度も終わろうとしていますが、いろいろな課題もかかえています。昨年11月には、それら課題解決の方向性を見定めるため役員懇談会を開催して活発な議論を交わしました。

とりわけ大きな課題となったひとつに「美術講座の今後」がありました。

現在行われているボランティア養成のため婦人美術講座には、毎年200人から300人の応募があります。しかし、受講できるのはその中の50人だけなのです。この受講者はボランティア活動の希望部門別に抽選で決められますが、50人に限定されるのは受講施設の制限によるものです。

これだけでは住民のみなさんの要望にできていないので、これを今後どうしていったらいいのかというのが問題です。

受講枠を増やすためには、

●広い会場の確保が必要では

(館内に求めるのか、館外でもいいのか。またその確保や経費は)

●講座回数を増やしては

(現在の会場確保が可能か、講師陣を確保できるか)

現在は美術講座を80%以上受講し、当会のボランティア活動の実態をみた上で活動を希望する人は部門毎の養成研修に進み翌年度のボランティア部員に入部する仕組みになっていますが、そこまで残るのは20人前後の人たちです。

200人から300人の応募者ははたして本当にボランティア活動を希望しているのだろうか。美術講座を受講したいという気持だけの人もいるのではないだろうか。その

の応募者のアンケート調査ではボランティア活動希望者が多くを占めています。となると、応募者が思っていたボランティア活動と現在行っているボランティア活動に予想外の差があるのかもしれない。

現在のボランティア活動は、主に館内でおおよそ半日を曜日・時間を決めて活動していますが、その他研修とか運営などにかかわる人もおり結構な時間拘束を受けることになっています。

自分の出来る時間、出来ることでボランティア活動をしたいと考えて応募した人もいます。さらには、女性に限らず男性にも門戸を開くべきだという意見もあります。

ニーズに合ったボランティア活動をするには

●現在の活動は継続し、新しいボランティア活動の受皿が必要では

(受皿の核となる人材確保、活動の拠点となる場所等の確保それに伴う財源問題は)

●活動の範囲拡張が必要では

(現在の活動範囲をどうするか、新しい活動範囲をどう設定しその開発はどうか)

当会としては、現在のボランティア活動だけで満足しているわけではありません。現行ボランティア部についても検討しなければならない部分があるでしょうし、更に館外に目を向けた活動も必要と考えています。それらを具体化するためには館の意見も十分聞かなければならないし、活動希望者のニーズも勘案しなくてはなりません。活動内容を要約すれば美術館普及活動への協力拡大が主になろうと考えます。

いずれにしても、この事業を拡大するためには活動の拠点となる場所等の確保(現在は館側の協力により便宜供与等を受けているが十分な状況にはない)だけでも相当の経費負担を余儀なくされるわけで、これらの財源確保のためには会員拡大による会費収入の増、収益事業の収入増、果実増のための原資(基本金)増に期待するしかありません。

以上の概略のほか、付帯して解決しなければならない問題は大小多岐にわたっていろいろあります。

従って、そうした条件の諸々の解決に努力しながら美術講座については継続的に検討していかなければならないだろうということになりました。

ただちにみなさんの要望に答えられないのは残念ですが、実態を理解してほしいと思います。

今までやってきたボランティア養成のための美術講座は、来年度も本年度同様のかたちで実施します。

美術館はみなさんのもの

お誘い合わせのうえ普段着でおいでください。

住民のみなさんの中には「近代美術館」を知らない人がおられます。知っていても「行ったことがない」という人もおられます。「絵なんか、わからない」という人もおられます。「格調高いところだから、わたしなんて……」と尻込みする人もおられます。

その数は、そう少ないものではないようです。仮に年間の近代美術館入館者を20万人としても、札幌の人口比率でみると170万人分の20万人で12%弱ということになります。

入館者は数が多ければいいというものだけではなくと考えますが、地域住民の「知的レジャーの場」として美術館はもっと利用されてもいいのではないかという気がします。

当会は、どうしたらもっと多くの住民のみなさんが美術館を利用してくれるだろうか、そのためには何をして

いったらいいだろうかを大きな課題として論議を重ねています。

美術館に縁の薄い人も、何かの「きっかけ」があればきっと感動する作品に出会うことができるでしょう。

美術に関心の深い会員のみなさんが隣の方に・地域のの方に・友人の方に・同僚の方に・グループの方に「きっかけ」となる声をかけてもらえませんか。

これは、人々の生涯学習意欲を高め、その輪を広げていく大きな運動のひとつにもなると考えます。

美術館に来る機会ができれば、作品との対話も生まれてくることでしょう。限りない自己啓発も期待できるでしょう。

地域の人々の眼に、美術館が色褪せたものに映るとしたら住民共有の宝は持ち腐れも同然で悲しいことではありませんか。

新入会員の紹介 (平成4年7月～12月)

●7月会員

渡部 紀美世 札幌市
小野 幸子 札幌市
友廣 友子 札幌市
今 香代子 札幌市
曾根 アヤ子 旭川市
倉重 怜子 旭川市
倉兼 朱美 旭川市
藤田 智恵子 札幌市
渡部 久代 札幌市
藤井 あつ子 江別市
宮崎 圭祐 札幌市
長谷川 志津子 旭川市
辻 貞利 札幌市
菊田 ヒナ子 札幌市
橋本文子 札幌市
輪島 紀子 苫小牧市
林 美和子 札幌市
吉野 京子 札幌市
長谷川 紘子 江別市
長居 千鶴子 札幌市
岩城 節 札幌市
河野 紘 札幌市
長部 芳子 札幌市
諸橋 英子 札幌市
松田 朋子 札幌市
磯部 稔子 旭川市
西山 貞恵 札幌市

村端 紀代子 旭川市
小林 蘭子 札幌市
福田 チェ子 札幌市

●8月会員

松田 嘉博 札幌市
江利川 朋子 札幌市
藤野 進一 札幌市
石本 朋子 札幌市
平方 光子 函館市
平松 タミ 札幌市
栗原 孝子 札幌市
川口 美保子 札幌市
砂子沢 昭久 札幌市
小田原 なほみ 札幌市
大西 澄子 札幌市
佐藤 雅之輔 札幌市
庭山 正美 札幌市
重信 栄一 岩見沢市
武隅 久美子 札幌市
小島 三千代 札幌市
浅井 久子 札幌市
長尾 恵美子 札幌市
中村 啓子 小樽市
遠藤 洋子 札幌市
川内 佳子 札幌市
田村 絵里 札幌市
関谷 稔子 札幌市
久保田 悦江 札幌市

永村 久恵 札幌市
松本 浩太郎 札幌市
及川 慶子 札幌市
小林 孟 札幌市
中力 雅子 札幌市
市瀬 晃 札幌市
平山 純子 札幌市

●9月会員

藤原 房子 札幌市
加藤 克紀 北見市
岩田 茂子 札幌市
富樫 宮吉 札幌市
甲斐 京子 帯広市
佐々木 信子 札幌市
澤田 昭子 札幌市
土倉 俊子 札幌市
中川 洋子 札幌市
側見 真 札幌市
遠藤 英子 室蘭市
菊地 美恵子 札幌市
永田 洋子 旭川市
高井 勝江 札幌市

●10月会員

鈴木 岩雄 札幌郡
成田 京子 札幌市
八幡 輝枝 旭川市
山口 毅紀 旭川市
浅沼 利美 石狩町

山内 貞子 札幌市
高見 純代 小樽市
高橋 美恵子 札幌市
関根 文子 札幌市
北村 忠一 苫小牧市
菅原 みゆき 札幌市
土橋 修 札幌市
佐藤 元治 札幌市
宇佐見 京子 札幌市
中 一夫 小樽市

●11月会員

吉木 ひとみ 札幌市
背地 早苗 旭川市
原田 久枝 札幌市
佐藤 ヒサ子 札幌市
山口 治子 岩見沢市
松尾 徹也 札幌市
山本 晋 石狩町
大山 裕子 札幌市
佐藤 和子 札幌市
脇本 津弥子 札幌市
時任 生子 札幌市

●12月会員

佐藤 山紀子 札幌市
辻 フミ 札幌市
楠木 義治 札幌市
飯村 とよ子 札幌市
田村 春枝 札幌市

北海道立近代美術館

平成5年度の当館の展覧会事業を紹介します。

約3千点にのぼる所蔵品を、さまざまなテーマを通して紹介する「これくしょん・ぎゃらりい」は、今年度も5回の会期に分けて計7本の展覧会を開催します。

なかでも「異郷の画家たち1920s-1930s」展（7月25日～10月3日）は常設展示室全室を使った意欲的な展覧会です。1920年代～30年代はパリ、ニューヨークなどが国際的な美術活動の中心地となり、日本からも多くの作家が渡航しますが、同時に上海、満州、京城、北方などのアジア各地が新たな取材地として注目されています。この展覧会ではこうした異郷での美術家たちの活動を紹介します。

このほか「花の彩・華の艶」「小樽・札幌＝二都物語」「ガラス＝20世紀のかたち」「色の詩学＝色彩表現の現在」「器の夢＝ガラスの小宇宙」などを開催します。

今年度の特別展の皮切りは「スーチン展」（4月10日～5月16日）です。エコール・ド・パリを代表する作家の一人で、強烈な色彩とうねるような激しいタッチで知られるシャイム・スーチンの全貌を生誕100年を記念して紹介する日本では初めての本格的な回顧展です。続いて開催される「明治の洋画」展（5月22日～6月20日）では西洋伝来の写実描写から次第に日本的な表現へ向かった明治期の絵画の特質を探ります。

一人の作家の画業をじっくり堪能できるワンマンショーが多いのが今年度の特徴です。「北岡文雄展」（6月26日～7月20日）は現代日本の代表的な版画家であり、北海道の版画界の発展にも尽力した北岡文雄の作品を紹介します。続く「ゴーギャンとポン＝タヴァン派」展（7月25日～8月29日）は、フランス、ポン＝タヴァンの地で印象主義を超える新たな表現を追求したゴーギャンら一群の作家に焦点を当てるものです。初秋の美術館を彩るのは「東山魁夷展」（9月4日～10月3日）です。深い精神性に発した独自の「青の世界」をご鑑賞ください。当館のコレクションの一つの核を形成しつつあるオプティカル・アート。錯視の効果で運動の幻覚を引き起こすこの様式を代表する作家を紹介する「ヴィクトル・ヴァザリ展」（10月30日～12月19日）で年末を迎えます。正月は今年から新たなスタートを切った美術鑑賞入門展「A★MUSE★LAND'94」（1月5日～2月6日）、年度最後は社会の変容を反映した多彩な人間表現を所蔵品を中心に紹介する「現代の人間像＝1960年代以降」展（2月12日～3月31日）を開催します。このほか夏休みには、好評のミュージアム・スクールを、また10月には「手で見る美術展」（貸館）を開催予定です。

北海道立旭川美術館

北海道立旭川美術館の平成5年度の事業を紹介いたします。

「北のロマン＝風景画の詩情」（4月4日～5月30日）道北ゆかりの作家たちによる詩情あふれる風景画の数々を展示します。

「ジョージ・ナカシマ展」（6月5日～7月11日）

ジョージ・ナカシマ（1905～？）は、アメリカ生まれの日系二世で、木を生かした独自の家具制作で世界的に知られています。日本の家具にも多くの影響を与えたナカシマの芸術を総合的に紹介します。

「日本芸術院所蔵 昭和の日本画展」（7月17日～8月22日）

日本芸術院所蔵の横山大観、上村松篁、東山魁夷ら巨匠の作品43点を展示し、昭和期の日本画の側面を紹介します。

「風と時と神々＝北海道の現代木彫」（8月28日～10月3日）

北海道の近年の木彫の動向を砂澤ビッキらすぐれた作家の作品により紹介します。

「芸術のニッポン＝北斎漫画と版画のジャポニズム」（10月9日～11月14日）

森羅万象を描こうとしたとされる「北斎漫画」がヨーロッパ美術に与えた影響を、「北斎漫画」およびロートレック、マネなどの版画作品により紹介します。

「深井克美展」（11月20日～12月19日）

函館に生まれ、わずか30歳で自ら命を絶った深井克美の幻想的で苦悩に満ちた世界を紹介します。

「北の光＝北欧の印象派」（1月5日～2月13日）

ノルウェーの巨匠ムンクをはじめとした印象派的手法による北欧の画家たちの魅力を紹介します。

「A・MUSE・LAND'94」（2月19日～3月27日）

「子どもと親の美術館」の新シリーズ展で、美術のさまざまな要素をわかり易く紹介します。



砂澤ビッキ「ニツネカムイ」
1988年



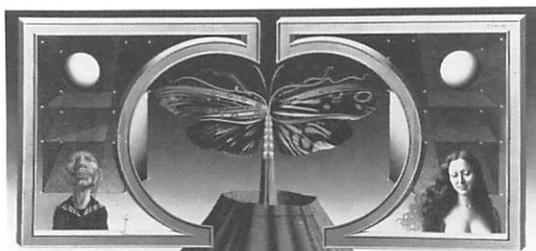
東山魁夷「光昏」1955年

北海道立函館美術館

平成5年度に予定されている函館美術館の展覧会事業を紹介します。

まず常設展の「道南ゆかりの作家コーナー」では、4月からの「新収蔵品展」に続き、当館コレクションの中から田辺三重松や岩船修三、橋本三郎をはじめとする道南の代表的作品のほか、文字・記号に関連する現代美術を紹介いたします。また同じく常設展の「鷗亭記念室」では、金子鷗亭氏から寄贈を受けた、日本を含む東洋の絵画、陶磁器、書などを紹介します。どちらの常設展も年間4期に分け、それぞれに企画性をもたせ、皆さんに楽しんでもらえる内容のものを予定しています。

次に特別展は、「ウィーン幻想派展」(4月10日～5月9日)を皮切りに年間9本の展覧会を開催する予定です。同展では、第二次大戦後、オーストリアに誕生した新たな芸術運動「ウィーン幻想派」の代表的作家5人を中心に、その全体像を展望します。また道南の作家を紹介する「秋山沙走武展」(5月15日～6月13日)は、一貫して乾漆による塑像を制作し続ける秋山沙走武の30年以上にわたる作家活動を回顧するものです。当館のコレクションと連動して、毎年「書」の展覧会を開催していますが、今年は函館にゆかりの深い歌人、石川啄木の作品を素材とする「石川啄木と書の世界」(6月19日～7月11日)を企画しています。現在活躍中の近代詩文書作家66名の新作のほか、啄木関連の資料も展示する予定です。「竹久夢二展」(7月17日～8月22日)は、生前の夢二を知る河村幸次郎のコレクション300点により夢二芸術の全貌を、また「昭和の日本画展」(8月28日～9月26日)は、日本芸術院所蔵の作品50点により昭和初期からの日本画の歩みを紹介するものです。年末から翌年にかけては、道立近代美術館のコレクションによる「ヨーロッパの現代版画展」(11月27日～12月22日)、当館のコレクションを中心とした「函館・道南の美術」「描かれた文字・書かれた絵」(いずれも1月22日～3月27日)が開催される予定です。

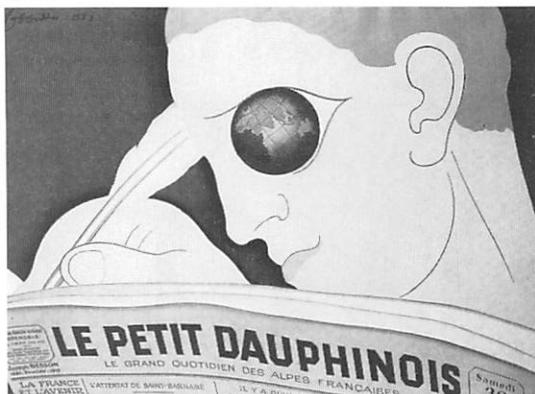


ハドル・ハウズナー 「愛の樹」1979年
ウィーン幻想派展より

北海道立帯広美術館

所蔵作品を紹介するコレクション・ギャラリーでは、4月3日から当館で新たに収蔵した今世紀初頭のアール・デコのポスター作品の中からすぐれた作品を紹介いたします。続く8月14日からの『楢原武正展』では、十勝管内広尾町出身の現代美術家楢原の代表的な作品を紹介いたします。この展覧会は、作家と市民による共同制作『アート・ウォッチング'93』に関連して開催するものです。

主展示室で行う特別企画展は、4月3日から5月5日まで岩橋英遠、片岡球子などの北海道の代表的な日本画家たちの作品により本道における日本画の歩みの一段面を紹介いたします。5月9日から6月20日までは『珠玉の英国絵画展』を行います。英国ロマン主義を確立した、ターナー、コンスタブルなど、18世紀から19世紀に活躍したイギリスの代表的作家の作品をマンチェスター市立美術館所蔵作品によりご鑑賞ください。6月26日から8月8日まで『印象派とヨーロッパ近代絵画展』を開催します。近代絵画のすぐれたコレクションを誇る米国オハイオ州のコロンバス美術館の所蔵品により、モネ、セザンヌ、ルノワール、ピサロ、ドガなどの印象派の作品のほか、19世紀末から20世紀初頭を彩ったドイツ表現主義、フォーヴィスム、キュビズムなどの巨匠たちの作品86点を紹介します。本展出品のほとんどはかつて公に紹介されたことはない作品です。美術史上の隠された名画の数々をご堪能ください。8月14日から9月12日までは、『ポーランド・ポスター展』を開催します。今世紀近代美術の誕生とともに進展したポーランドのデザイン運動の成果は、世界のデザイン界の中でもユニークな地位を確立しました。1950～60年代には「ポーランド派」と呼ばれるようになり、その伝統は今日でも若い世代に受け継がれています。1900年以降今日に至るポーランドのポスター作品をワルシャワ国立ポスター美術館の所蔵品により紹介します。



カビエッロ「ル・プティ・ドーフィノワ」1933年
北海道立帯広美術館蔵

北海道立三岸好太郎美術館

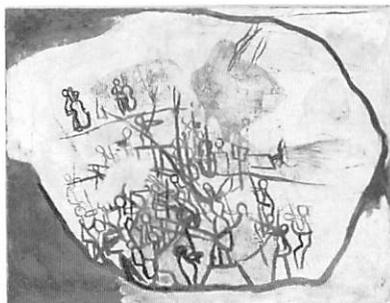
平成5年は三岸好太郎（1903-1934）の生誕90年にあたります。当館ではこれまでと同様、三岸の芸術のより深い理解をはかり、多くの方に彼の画業に触れてもらえるよう、展示や調査研究活動を充実させ、さまざまな普及事業をもあわせ、個人作家美術館としてふさわしい活動を続けていくつもりです。

さて今年度は特別展を2回開催します。

「鳥海青児と三岸好太郎展」（6月3日～7月21日）は、独自の油彩画の表現の可能性を探究した鳥海青児（1902-1972）との交流を探る企画です。三岸好太郎と鳥海青児は春陽回への出品を通して知り合い、その若手作家で組織した麗人社でもともに活動しました。昭和3年には北海道と一緒に旅行して、札幌で節子夫人も参加した三人展を開催しました。互いの力量を認めあい、私的にも芸術の上でも二人の間には大きな交流があったと思われま。本展では大正末から昭和初期にかけての二人の作品を通して、その芸術の関わりあいや、それぞれの展開をたどろうとするものです。

「三岸好太郎の〈オーケストラ〉」（10月1日～11月21日）は、三岸の晩年の代表的作品《オーケストラ》をめぐるものです。新しい絵画の動向に大きな関心を持って自らの造形の方角を探っていた昭和8年、交響楽団の演奏風景にモチーフを得た《オーケストラ》の連作は、斬新な技法と表現によるもので、彼の前衛的な意識を示しています。現在、そのシリーズでは当館所蔵のものと、宮城県美術館所蔵の作品とが残っています。本展ではこの2点の油彩の《オーケストラ》に加え、制作の過程を伝える興味深いデッサンや資料、また彼の音楽的関心を示す作品なども展示する予定です。

三岸の画業の展開をさまざまな側面からたどる所蔵品は年6期にわたり開催し、このほかコンサート、ミニリサイタル、小中学生向けの〈たんけん美術館〉なども行います。好太郎の芸術と美術館に親しんでもらえる企画となるよう思っています。



三岸好太郎「オーケストラ」1933年 宮城県美術館蔵

財団法人札幌彫刻美術館

当館では、昭和56年開館以来北海道在住の作家による「北の彫刻展」と、過去2年間日本全国の公共空間に野外設置された彫刻作品の中から優秀な作品を選考する「本郷新賞」を隔年で開催してきました。

平成5年度は、「第6回本郷新賞」事業を開催します。「本郷新賞」は、彫刻家本郷新の半世紀にわたる業績を記念し、彫刻芸術の振興に寄与するために創設しました。今回の選考対象は、平成3年1月から平成4年12月末までの2年間に日本全国の公共空間としての広場、公園、街路、公共建築物等にモニュマンとして制作設置された彫刻で作者の国籍は問わない。尚、作品は常時誰でも鑑賞できる場所に設置されていなくてはならない。

選考方法は、あらかじめ当館で委嘱した推薦委員が推薦した作品の中から選考委員が1点を選考します。受賞作品の発表は、7月15日を予定しています。また、「第6回本郷新賞」受賞を記念して、8月27日（金）～10月11日（月）まで受賞作家による作品展及び関係資料展を開催します。

これまでの受賞作品は、花巻市、名古屋市、三田市、札幌市、東京都と全国に点在しています。材質は、黒御影石とコールテン鋼であり、野外設置における耐久性に対応したものといえるでしょう。

北海道に限定しても、最近彫刻作品があらゆる場所に設置されています。設置者も行政関係以外にも企業が設置する場合もみられます。戦後日本における野外彫刻を制作する先駆者である本郷新が制作していた当時では考えられない状況といえるでしょう。現代では何よりも質が問われています。はたして今回の受賞作品はどのような作品が選ばれるのでしょうか。



本郷新制作「氷雪の門」

美術研修旅行記

オランダ、ベルギーの風景と美術館めぐりの旅

太平 弥生



旅行説明会の歸り「あんなに君が望んでいたオランダ受けといたよ」と主人、結局主人がオーケーしてきた旅行記を私が綴るはめになって

しまいました。

それは十月二十日朝三時三十九分旭川発の列車にのって始まりました。寒々とした広大なシベリヤ上空を四十六人のときめきをのせてゴッホの故郷、夜の阿姆斯特ダムに着きました。翌朝いたるところに運河に映える十七世紀に絶頂にたったという晩秋の美しい町並を楽しみながら、アンネが残した数々の遺品に涙し、又晩年の自画像レンブラントがみつめている「夜警」の部屋も印象的でした。このあとみた「トウルブ博士の解剖図」はテレビでみていましたがギョッとさせられました。

翌日思えば長年の夢だったゴッホ美術館で暗い色調のオランダ時代から晩年の南仏でいっきに咲いた柔かく燃えるような情熱の空間とのであいに震える思いでした。

それは今にも語りかけてきそうな口もと、動きそうな目、死ぬまで愛しつづけた自然への憧憬、それらは死後百年が過ぎたというのに生き生きと迫ってきました。

また黄色にそまる森の中に調和するクレラー美術館でミューラー婦人の確かな目で選びぬかれた絵画はしばし静寂な幸わせを味あわせてくれました。

本でもみたくもないゴッホの花屋公園の風景に弟テオとの文通の中のやさしさをしのばせました。

貧困にあえぎ愛を求めてやまず唯一の友人ゴーギャンにさえ裏切られさまようように絵筆を求めた爆発的な終焉の絵画はまさしく三十七才で逝つたけれど六十年ぐらীবんまでは生きてのではないかと思います。

マドローダムでは、まるで自分がガリバー旅行記の主人公のような気分ひたり、マリッツハイス美術館でのポッテルの「若い牝牛」の目の愛らしさにほっとし、又花、風景、静物などの細密描写におどろきました。

中世の景観をそのままとどめたブルージュ、大きく低

く流れる雲、天にとどけと延びる塔、歴史をきざむ石造りの建物、北海と結ぶ鳶からむ無数の橋、町全体を包みこむように黄金にゆれる木々、これらが一つの絵になって私達を迎えてくれました。

聖ヨハネ病院の当時の薬局、施療院などがあり、とても興味深く、グローニンゲ美術館では、ブリューゲルの「税の支払^{はらい}」の絵の中で意味ありげに何かを読む主人公がずるそうにみえ思わずふきだしてしまいました。ブーツ作「サンイポリットの拷問」は人間のエゴがむきだしにみえつらくなりました。ゲント美術館にあったボッスの「十字架を運ぶキリスト」は人物の表情、構図などが新鮮な驚きでした。

王立美術館では小さな子供達がどっかと床にすわり色紙で絵の勉強している姿はのびのびとおおらかでとてもうらやましく感じました。

最終日は古城めぐりに行く途中十二キロに及ぶマロニエの並木に遭遇しその美しさに目をみはりました。それはレースで名高いベルギーの名にふさわしく黄色の糸で編んだ天井画のごとく空を覆いその空間を木洩陽がゆるまるでステンドグラスのように輝いてみえました。

オランダ、ベルギーこの国を大きな額縁に入れたらまさしく美術館でみた風景画とぴったり合い、人をうつ絵画はその土地の風土に根ざして始めて生まれるものどつくづく思いました。みちたいた旅でした。

こゝで多くの出会った人々に感謝をこめて サヨナラ
また逢える日まで……………。



美術研修旅行記

海外美術研修旅行の印象記

辻 勉



私たち夫婦は「美の探究」B班として、九二年十一月三日から十一月十四日まで、オランダ、ベルギーを訪ねることができた。先に出発したA班が雨に祟られ非常に寒かった話を聞き、防寒具を用意して行ったが、幸いなことに私どもは傘をつかうことなく、用意した防寒具の世話にもならず済んだ。

私たちの旅行目的は、私は学生の講義用教材の収集であり、家内は趣味の写真撮影であった。二人で撮ったスライド写真の枚数は一三〇〇枚にのぼった。暇を見てパソコンで地名などのシールを作り、一枚一枚に貼り終わったのが二週間後、一気に映写してみて、楽しかった旅の数々が再び蘇ってきた。スライドに写し出された中から見過ごしていた新しい発見もあった。いまこの旅を振り返り、私個人として特に感銘を受けた点について述べたい。

一つは、ゴッホでありルーベンスでありレンブラント、さらにブリューゲル、祭壇画に圧倒されたことであった。絵画構成、光と影、技法の特徴、聖書の解説と合わせた苦名さんの博学にも感銘した。素人の私には大変な勉強である。いずれにしても、おそらく再び観ることのない豪華な美術に接する機会を与えてくれた企画に感謝したい。

二つには、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグなどベネルックス三国に共通するのであろうが、中世都市の美しい街、物悲しい雰囲気、メランコリックな空模様、昔から巨匠によって描かれた情景そのまま目の前にあった。その意味では一七世紀にタイム、スリップしたのかも知れない。

古い教会と城塞、バロックやゴシック建築の家並み、赤褐色の屋根、石畳の街路など中世そのままである。この佇まいは至るところに観られたが、ブルージュが圧巻であった。ハーグのミニチュア都市マドローダムも忘れ難い。

三つは、イギリス、ドイツ、フランス等大国に挟まれた小国の悲しい歴史が旅する者の心を打つ。ヒットラー

のユダヤ人狩りの対象となったオランダのアンネの隠れ家は何ともやるせない気持ちだ。一国の中でフランス語圏とオランダ語圏がわかれているベルギー、ミュース川をくだってくる仏軍を撃退するディナンの城塞都市、一八一五年ナポレオン率いるフランス軍七万四千人がウェリントン将軍が指揮するイギリス、プロシヤ、オランダ連合軍六万七千に敗れたワーテルロー等ヨーロッパの古戦場であったベルギー。今はブリュッセルにはEC本部がおかれ、九三年の経済統合にむけて官庁の建設ラッシュである。日曜日にオランダからベルギーに入国したが、国境検問所は無人でフリーパスであった。パスポート無しでの自由往来、統一通貨などヨーロッパ連邦国家構築へ向けてのベルギーの意気込みが感ぜられる。

また、旅は道ずれといういろいろな方と知り合い、楽しい一二日間であった。今回は、阿部団長さん、関川副団長さんに大変お世話になった。小杉さんのすばらしいソプラノ。苦名学芸員の解り易い説明。JT B添乗員の温かい気配りひょうひょうとしたガイドさん。現地の人との身ぶり手ぶりでの意思疎通などが私の脳裏をよぎる。私にとっては、非常に質の高いすばらしい旅であった。



美術研修旅行記

六甲山麗美術の旅

開 とき子

3泊4日。六甲山麗美術の旅です。9月29日千歳をフライト、伊丹空港13時40分曇空につく。専用のバスに乗り伊丹美術館にむかう。雨が降り出す、車が少々渋滞。通りより5分歩いて美術館に入る。早速講座室に入り館長代理のお話があり、酒処の伝統が生んだ俳諧文庫「柿衛文庫館」に隣接して建設され昭和62年11月の一般公開され今日の発展になった経緯を聞く。ホールより雨にぬれてる枯山水の庭園がひろがる。2Fの展示室へ。ケーテ、コルヴィイツ展そのデッサン、ロダンの感化から生まれた独自の彫刻、版画デッサン総計106点である。労働者の悲惨さに美しさを見ずにいらなかった女史の人間的な英知がひかる。ついで夕闇を芦屋の適翠美術館へ。豪邸つづく通りを歩く。10分位で植込み奥の玄関に入る。屋敷を改装しての静かな建物である。テラスから見ても庭も広く闇の中で見えない。二階の展示室には秋冬の京焼系陶磁器、茶器類の秀逸な品が陳列されている。別室には円山四条派の流れを汲む京、大阪画壇に作品、秋冬の画題をとったものを選んで、揚げ、上方文化の一端を見せている。階下で熱い茶をいたゞき退室する。15分ほど歩いてバスにのる。雨は強く光の流れの中をホテルにつく。翌朝よいお天気で、ほっとする。日中は暑くなりそう。兵庫県立近代美術館へ。立派な建築で本館を中心に西館、東館と展示室が分れている。1Fは近代彫刻の常設室である。西館3F展示室にはアンソールの版画、エッチング、油彩がある。東館の1Fに入ると小磯良平記念室があり戦前戦後を通して洋画界の大きな足跡を観る。的確な線画、知的な構成、清澄な色調に魅せられる。2Fの特別室に入る。ムンク展は100点の代表作がモデル達の写真と共に展示されている。ムンクの愛と苦悩、官能に彩られた一連の回顧展でもある。午後から兵庫県陶芸館にむかう。全但バス創立50周年の記念事業として昭和41年11月設立社長田中寛氏が長年蒐集した県内の古陶磁器その他、博物館資料の寄贈をうけた登録博物館でもある。その淵源を遠く鎌倉時代の古陶器、古丹波の名品が系統的に展示され、丹波焼のすべてを知ることが出来る。

又民芸木工品に加えて田舎家、茶屋もそのまゝの形で保存されている。此処を出て異人館の自由散策となる。坂道を上りつめた処に、プラトン装飾館を始め、その他三館をみる。ヨーロッパに調度品、絵画、美術品、洋式生活にマッチしたアンティークな調度品が多く18世紀-19世紀頃の生活装飾である。北野坂通りをぶらつく。今日少々つかれる。翌朝、9時30分神戸市立博物館へ。お天気で何より、少々むし暑い感じ。10時の開館と同時に中

に入る。吹抜けのホールが広々と左側階段を2Fへ。南蛮美術館、16世紀の西洋人の渡来して以降の影響を受けた絵画である。工芸品が展示されている。これらは昭和の始め頃、池長孟氏が系統的に収集されたもので約4000点以上もあるとの説明がされていた。その1部である華麗な南蛮屏風、重要文化財の「秦西王侯騎馬屏風」「四都図」「世界図屏風」重要美術品の「聖フランシスコ、ザビエル像」キリスト教に関連した名品、華麗な美術が陳列されている。その他常設展示室が、6つの大テーマで日本と外国との文化交流の様子を神戸に焦点をあてながら展示されている。一般市民に利用されギャラリー、映画等の実施、博物館だより研究誌の発行と多彩である。午後ポートアイランドへ車は走る。未来感覚の夢の島日本を代表するレジャーゾーン。甲子園120倍の敷地の人工島である。21世紀の海上文化都市も実現するでしょう。ポートピア81の会場跡に三十三階建て階円形のホテルがひときわ目立つ。暑くて上衣を脱ぐ。白鶴美術館の石塀



を入ると大きな敷石、庭に置かれたる自然石、玄関ホールから見える広大な庭の真中に据えられた大きな石灯籠も見事である。本館は、白鶴酒造七代嘉納治兵衛が、昭和6年古稀を記念して設立し、昭和9年完成開館した私立美術館の先駆者といえる。鶴翁が酒造りに力を注ぐと共に美術品の造詣も深く並々ならぬ熱意を傾けた。秋季展、中国金属工芸の重厚にして繊細な技巧の妙が清銅器、銀器、文様、錆色に表現され、ともに美しい逸品が陳列されている。次に香雪美術館、静かな住宅街ある。朝日新聞創立者故村山龍平香雪翁が新聞界に大きな業績を残すかたわら、翁個人としても美術品の蒐集に力を注ぐ。翁の没後四十年祭を機に、昭和48年11月に設立。翁の質量共にすぐれた大コレクションである。陳列品のあらまは、階下に名茶陶磁、階上は、室町、桃山、江戸と年代を追い、どの様に活用されてきたか、わかり易く展示されている。秋季展示品80選の外に常設の石造仏像、木造菩薩立像等翁の並でない鋭い鑑識眼を思ふことができる。雨が降り出す。北区の有馬温泉に伺う。翌朝8時30分出発4日目の朝は晴天で、六甲山展望台に車は走る。視界360度の大眺望を5分で回り展望する。遠く丹波、摂津、淡路、紀伊がみすんで。多勢の人と車で一ぱいである。六甲山高山植物園による。コマカサ、エーデルワイス等高山植物を中心に1500種の野草が群生。花の季節も去り小さな遅咲きが花を名残りに咲いている。27度近い暑さである。此処では夏の残暑。冷房のバスにのり伊丹空港へ。豊かな文化の土壌にはぐくまれた神戸を中心に美術品、陶磁器等視野がひろく楽しい旅でした。

美術研修旅行記

第一回 北海道美術館めぐりの旅に参加して

佐藤 啓



これまでの、美術研修旅行は、海外、国内で行われて来ましたが、国内は本州が主で、今回初めて道内美術館めぐりを企画していただき、道民美術愛好家の一人として、大変うれしく参加させていただきました。

ました。

海外、本州方面での旅行となりますと、時間的制約等で参加出来ない方も多いと思いますが、道内となると気軽に参加出来、且つ道内の埋もれた作家、美術品に接する機会も生まれ、美術に興味を持たれる人も増えていく事と思います。

この初の企画は、生憎にも大雨注意報の悪天候の中で幕明けとなりましたが、9月9日、25名は元気に1泊2日の旅へと出発しました。

今回の旅はバスツアーでしたので、行き帰りのバスの中、近美の奥岡学芸部長がテキストによる学習会を開いてくださり、私の様な素人にも解り易く説明していただき、帯広までの長い車中も退屈する事なく、時間が過ぎて行きました。

昼頃道立帯広美術館に到着、同館次長より、最近の美術館の現況説明、学芸員の方により特別展、山種美術館所蔵「緑の景-日本画の巨匠たち」の主な作品をスライドで解説していただき、一段と味わい深く鑑賞させていただきました。

この特別展は、日本を代表する戦後から現代に至る全ての日本画家の作品が展示されており、松（横山大観）竹（川合玉堂）梅（川端龍子）の三人の合作品、又東山魁夷の「緑潤う」は全てのものから解き放たれ、心が洗われる如く感銘いたしました。

私事となりますが、今から十数年前、今は亡き美術好きの妻と共に、東京の山種美術館を訪ねた事があります。

あの時もしか、東山先生の作品の前で二人共々目を奪われればし動けなかった事を記憶しております。

今回の旅行に参加した事も、想い出の山種美術館の作品に会える事への期待が多にあったと思います。

こうして月日がたち、同じ作品の前で同じ感動を受けている自分に、ふと妻を想い人生を感じつつ、美術館を後にしました。

この後、烈しい雨の中、帯広百年記念館、ビート資料館と回り、夕刻今回の宿泊地然別湖畔のホテルへ無事到着いたしました。

夕暮れ迫る湖畔は、雲が低く垂れこめ、まるで水墨画の世界そのままの荘厳な風景でした。

このホテル福原には、館内にミネルバ美術館が有り、宿泊者には無料で観賞出来る様になっております。個人が収集した作品とはいえ、道内から国外の作家やまた色々なジャンルの作品が展示され、オーナーの「もっと気軽に芸術・文化に触れ親しめれば……」と言う願いが感じられ共鳴いたしました。

次の日も願い空しく雨はやまず、十勝の自然を愛し続けた坂本直行美術館へ向い、柏林に降りしきる雨の音をBGMに先生の感性豊かな作品をじっくり観賞し、最後の訪問地グリュック王国へ向かいます。

残念ながら雨の為、記念写真もそこそこに皆バスの中へ一路札幌へと帰途につきました。

今回の旅は不運にも大雨にたたられました、道内の美術に接し、改めて芸術の奥深さを痛感いたしました。

この様な旅をまた企画されます事を切に希望し、この辺でつたない紀行文をまとめさせていただきます。



並木と落書き



熊沢 武雄

私は、厚別副都心に程近いこの青葉町に居を定めて二十年余になる。小鳥さえずる緑地帯に近く、開道百年記念塔を望むこともできる静かな住宅地である。

家々の庭園も年とともに、見応えを増してきたが、秋も深まると街路樹のいたやもみじやななかまどが、自然の営みで日毎に彩りを添え、趣きを変えて、私どもの心をなごませてくれる。

ところで、健康づくりの一環として、町民ラジオ体操会の会場になっている青葉中央公園野外ステージの柱に、大胆に落書きされていることが発見され問題になった。翌朝で体操会を終える日の朝のことだった。

この公園は、市民の憩いの場として広く利用してもらおうべく、本格的に整備された施設で、心ある市民は望ましい環境は守ろうと心を砕いているだけに、残念に思われてならない。青少年健全育成にむずかしさを、泌々と考えるこの頃である。

豊かということ



田中 和子

生活する中で何度か劇的な事にあう事があります。

昭和三十九年、私は社会に一歩足を踏み入れ、世の中は経済成長のスタートを切った頃でしょうか。

そんな時「松方コレクション展」のポスターは眩しく、中島スポーツセンターのナガールイ行列は人々の心の有様ありさまだった事でしょう。

十九世紀後半のフランス絵画、彫刻、クールベ、モネ、ルノワール、ロダン等、芸術の香りに直接触れると思うと気持ちが高まります。

作品の前に立つと制作現場に立ち合っている様な、緊迫した緊張感に圧倒されもみくちやになりながら飽かず見続けました。

数えきれない程季節が変わってもあの時の感激は薄れずにあります。昨年四月美術館ボランティアの一員に加えて頂き、可能性を秘めたたびきりの時間を継ぎあわせている。

椿の絵



黒澤 伸子

お茶の稽古に通うようになってから、椿の花が特に好きになっていました。北海道の路地にはあまりみられませんが、小田原の妹の家の庭には、様々な椿が咲き、手折って持って帰りたいと何度も思ったことでした。そして椿の絵柄のものを集めはじめ。ユキツバキの茶碗、白玉椿の帯、ワビスケの香合、年賀状にも下手な絵を描く。十一月からは百合ヶ原の温室までスケッチに出かける、とゆうエスカレートぶり。ある時、M画廊に以前から欲かった深紅色の花びらの「山椿」の絵に出会いました。へちまへちまと高いワ。

帰宅する夫にさっそく話してみると「着物も服も買わず、旅行もせずならば買えるだろう!」。ア、高級でなくてもどれも欲しいもの。

それから半年、再びM画廊を訪れる。まだ売っていないとの事、良かった。それでもまだ決断出来なくてソファに座して眺める。「他の椿もありますよ」ともう二点飾って下さる。増々迷う。「最初の椿にします」やっ

と決まり、届けていただきました。椿を描く五味悌四郎の作でした。小田原の庭にも今ごろは椿がふくらんでいることでしょう。

視る



坂下美恵子

画集をバラバラとめくっていると、一枚の絵に目が止まった。省略化された静物画であったが、引き寄せられる様に暫らく眺めていた。本を閉じて、さてと腰を上げたが、その絵が目の前に散らつくのである。もう一度画集を開いて見ればみる程に、画面の中から作者の視線が感じられて、不思議に思った事がある。モチーフを凝視し己の世界を描く事に没頭してしまふと、静物までもが自分自信を取り込んで、己になり変わるような錯覚さえ感じた。

時折、思い立って美術館へいく。展覧会も淡々と見終えて西側の階段を登りおえた時、はっとする光景を見る事がある。まるで抽象画の世界だ。それは南側に広がったロビーのガラスを透かした前庭の緑の風景に、西側の風景が重なり写ってできた蜃気楼の様な美であった。……視ること、それが文化を創り育てる原点と思う。

ふたりだけの手紙の絆

パスキンに翼がついた
あの方に送るあなたの心にパリの憂愁がお供します



北海道美術館協力会オリジナル商品
パスキンシリーズ
レターセット好評発売中

罫線つき便箋・封筒セット 600円

罫線なし便箋セット 400円

(消費税含まず)

会話を拾う

●回帰申込

「印のついた申込書はどのくらいになったのかねえ」
「会員ひとりが新会員一人の入会をお誘いするという依頼のやつかい」

「そう。全会員にリーフレットを送ったんだけど反応はどうかね」

「残念ながら現在のところ51通しか申込がない」

「発送1,300部の4%ということか。気長に持つしかないかなあ」

●お断りは辛い

「今年のカレンダーの売足は早かったねえ」

「これくしょん・ぎゃらりの展示とタイミングがよかったし、9月発売もよかったのかな」

「道産子画伯の作品が道民の琴線をかきたてたのかもしれないね」

「道外の購入者も多かったよ」

「それにしても、品切れのお断りというのは辛いもんだね」

●工夫の余地は

「拾いあげてみると課題は随分あるもんだなあ」

「15年間に残した業績のかけに積もった垢とも言えるね」

「この解決は、一朝一夕にいかないものもあるけど……」

「事務局プロパーの問題には工夫の余地がないとも限らない」

「事務のOA化とか、業務の外部委託とか？」

「まあ、当面そのへんだらうね」

●約束ごと

「規則・規約といったものばかりでなく約束ごとは守って欲しいものだね。……」

「組織が大きくなればなるほど、その遵守は不可欠だよ」

「決まった以上は、その線で行く。この基本が浸透していない場面がちょくちょく顔を出してくる」

「会員の住所変更届、退会届なんかもそのひとつかな。きっと忘れてるんだと思うけど。それにしても転居先不明は結構な数だからねえ」